

森林教室・産業祭り等のイベントの成果と今後の課題

三陸中部森林管理署 世田米森林官 久坂 浩志

1. はじめに

三陸中部森林管理署では、これまで森林教室への講師の派遣や産業祭りでの木工品の展示販売と木工教室を開催することで地域のイベントに積極的に参加してきました。

産業祭りでの木工教室は、子どもや家族連れに人気があり、秋刀魚まつり等の食材をテーマとしたイベントの中でも林業関係団体をリードするブースとして定着し、それなりの評価を得ているところです。

平成15年度は、さらに開かれた国有林をアピールしようとする新たな発想と視点で地域に密着した森林管理署を目指し、イベント等に取り組むことにしました。

今回は、その中から新しく取り組んだ実施メニューとして、「遊々の森」における総合学習とボランティアによる「一日森林官」への取り組みを発表します。



写真-1 釜石味覚フェスティバル



写真-2 大船渡市産業まつり

2. 遊々の森における総合学習への取り組み

私たちは、昨年の発表で大船渡市立末崎中学校の総合学習への取り組みを紹介していますが、学校や先生が「遊々の森」に興味を持っていることがアンケート調査からも分かり、学校と協議を重ねながらフィールドの選定作業を進め、平成15年5月22日に「遊々の森」の協定を締結することができました。

当日は、末崎中学校3学年の生徒と引率の先生や森林管理署の職員が見守る中、生徒代表の司会進行で島山校長と福土署長が青空の下、協定書に署名しました。

セレモニーに引き続き業務課長から安全作業上の注意や作業についての説明がされ、参加者全員を9つの班に分けて、森林管理署職員の指導で植樹祭等では経験できない地拵作業を手鋸や鎌を使って行いました。

生徒は、慣れない作業に手こずりながらも鼻の中まで真っ黒にし、枝や残材の処理を

文句も言わずに頑張り、午前中に植樹スペースを確保して作業は終わりました。

午後からは、用意された約2千本のコナラとクリの苗木をそれぞれの班が将来の栗やどんぐり拾いをイメージしながら唐鍬で丁寧に植え、2時間ほどで作業を終えました。

最初のうちは悪戦苦闘の様子でしたが時間が経つにつれ手際が良くなり、職員には無い若さと行動力で重労働に耐え事故もなく作業を終えることができました。



写真3 - 地拵作業



写真4 - 植付作業



写真5 - 昼休み職員との交流



写真6 - 作業を終えてハイ・ポーズ

3. 総合学習に関するアンケート調査

「遊々の森」の協定締結に向けての取り組みとして、末崎中学校の教職員を対象にアンケート調査を実施したことは、昨年の発表で報告していますが、「遊々の森」をフィールドとして実際に作業を体験した生徒全員を対象にアンケート調査を行いました。

アンケート調査は、作業体験を生徒がどのように捉えているのか、今回の体験学習で総合学習の目的が達成できたのかを把握し、今後どのようにして総合学習に活かしていくかをテーマに行いました。

アンケート調査の結果

問1. 森林・林業を知るうえで作業体験は必要ですか

- ①必要と思う85% ②必要とは思わない5% ③よく分からない10%

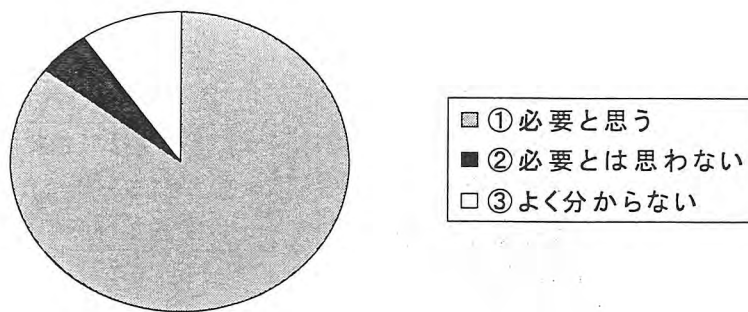


図-1

問2. 体験を通して海と森林の関係が理解できましたか

① 理解できた 85% ② 理解できなかった 0% ③ よく分からない 15%

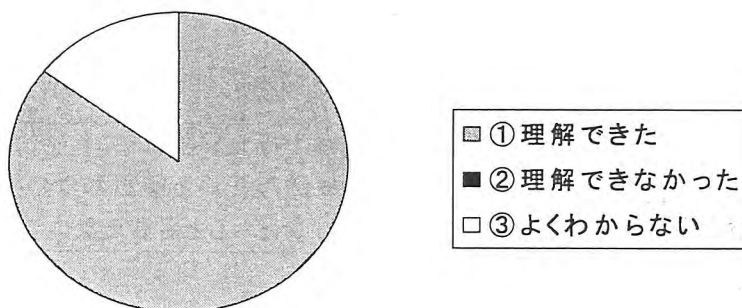


図-2

問3. 作業で危ないと思うことがありましたか

① 安全だと思った 15% ② 危ないと感じた 44% ③ 普段と変わらない 41%

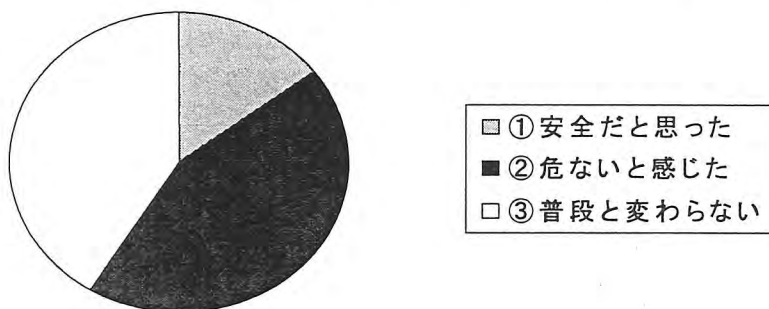


図-3

問4. 今までの総合学習の体験よりも作業が大変だと思いましたか

① 思ったより楽だった 2% ② 大変だった 53% ③ 普通だった 45%

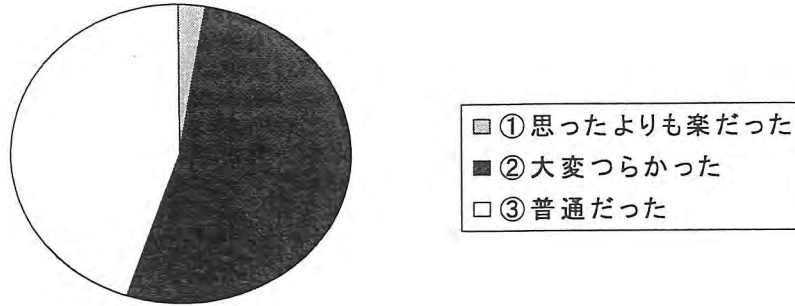


図 - 4

問 5. 何年かした後で「産土の森」を見たいと思いますか

① 見たいと思う 68% ② 見たいとは思わない 2% ③ どちらとも言えない 29%

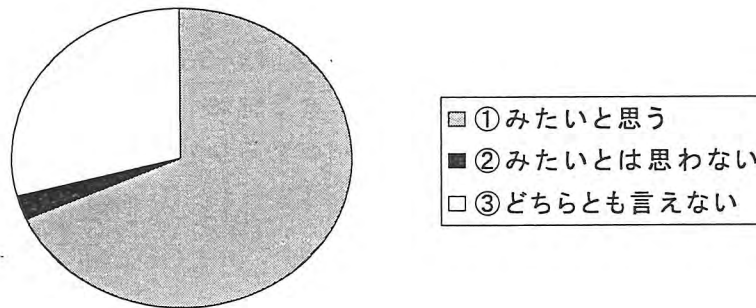


図 - 5

問 6. 産土の森を自分たちの森林と思えるようになりましたか

① 思える 49% ② 思えない 15% ③ どちらとも言えない 36%

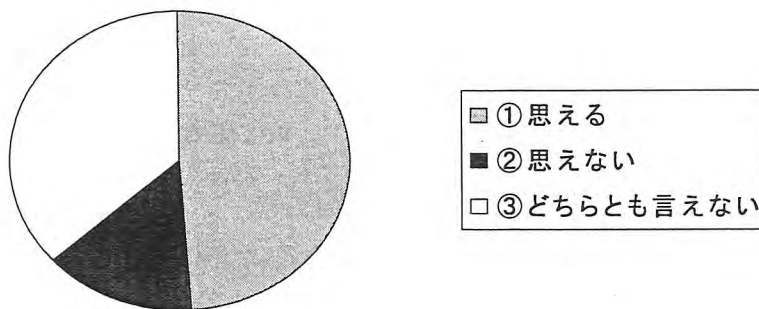


図 - 6

問 7. 後輩に産土の森での体験学習をしてもらいたいと思いますか

① 思っている 66% ② 思わない 2% ③ どちらとも言えない 32%

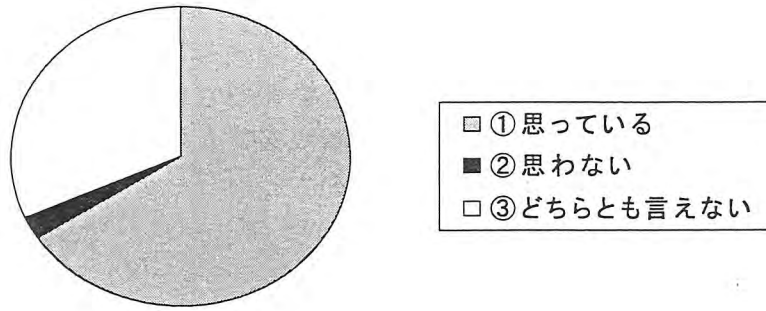


図 - 7

問 8. 今後、機会があれば森林での作業にボランティアで参加したいと思いませんか
 ①参加したい 10% ②参加したくない 5% ③どちらとも言えない 85%

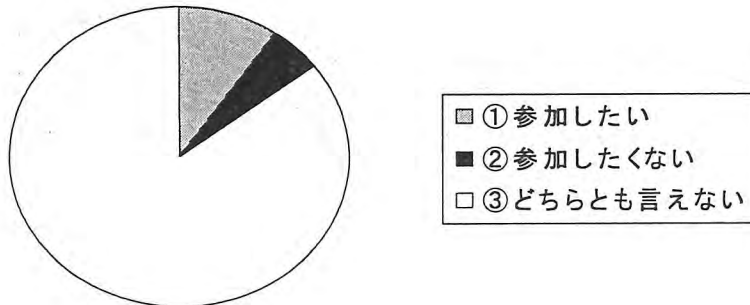


図 - 8

「遊々の森」の協定を締結し、作業体験したことで学校での「総合学習のまとめ」の時間では、森林や林業に関する疑問点や調べたいことが多く出され、一定の成果を上げることができました。

また、作業を終えての感想やアンケート調査からは、つらい作業にもかかわらず作業体験の必要性と森林や林業に強く関心を持っていることが分かりました。

4. ボランティアによる 1 日森林官の取り組み

私たち森林官が日常現場で行っている業務を PR したいと考えていたところ、森林官にスポットを当てた実施メニューで取り組むことになり、署長のアドバイスを受け検討したところ、ボランティアによる 1 日森林官を募集することになりました。

4 月 29 日の五葉山の山開きに合わせ大船渡市広報で公募を行ったところ 4 人の申し込みがあり、女性一人を含む全員に委嘱状を交付することができました。

この時期は山火事の危険期であることを踏まえ、山開き会場から五葉山の山頂までをタバコの吸い殻入れやポケットティッシュを配布しながらの啓蒙活動と前年度に設定された「北上高地緑の回廊」のパンフレットを配布しての PR 登山を行いました。

昨年の山開きは、五葉山自然保護協議会主催の行事として捉えていたためか、頂上を目指すだけの登山でしたが、今回は、4人の森林官へ先輩の仕事ぶりを見てもらおうとハリキッテ望みましたが、勉強不足を痛感する1日でもありました。

1日森林官を公募したことで仕事に自覚を持てるようになり、国有林への地域からの意見や要望を直接聞くことで業務に反映できることから多々あり、五葉山にスポットを当て、今後も継続したいと考えています。

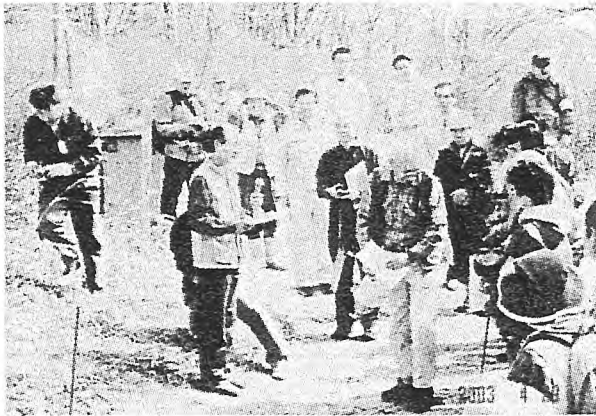


写真-7 委嘱状の交付



写真-8 山頂での記念写真

後日、1日森林官へのインタビューでは、

- ①応募は、会社で植樹や育樹は経験したが五葉山に登ったことがなかったから
- ②1日森林官の体験を会社の人、家族、友人に話したら興味深く聞いてもらえた
- ③山のマナーを守らない人に他の1日森林官が注意していたが、自分から注意できなかったのは今でも残念だ
- ④このような企画があれば子どもが大きくなったら一緒に参加したい
- ⑤1日森林官になったことで森林管理署が身近に感じられ、来署しやすくなった
- ⑥子ども森林官等の企画があれば家族や知人に奨めたい
- ⑦初めての経験ということもあり準備が大変だったのでアドバイスして欲しい
- ⑧木工教室やイベントを産業祭りだけでなく、別の日に署単独でも行って欲しい
- ⑨公募するときは、もっとPRして欲しい等のコメントをいただきました



写真-9 1日森林官へのインタビュー

このように、五葉山への登山を目的に応募された方が、1日森林官の経験を知人や家族に話してくれたことでPRになり、実施メニューによっては、家族や知人に奨めたいとのコメントを得たことで、今後の企画に活かせたらと思います。

また、今回のイベントを通して森林管理署が身近に感じられ、入りやすくなったことは大きな成果だと思います。

5. マスコミへの情報提供

三陸中部森林管理署では、平成14年11月27日に青森分局第一号の遊々の森の協定を締結しましたが、マスコミ等に情報提供することもなかったことから職員の中でも特に話題にされることもありませんでした。

また、今まで行われたイベント等でも大部分が後援や共催での開催であり、森林管理署が全面に出て、マスコミ等に取り上げられることも殆どありませんでした。

平成15年度は、森林管理署の取り組みをPRして存在感をアピールしなければと考え、ローカルなイベントは地元紙や市の広報に、メジャーな取り組みは分局を通してマスコミ各社にプレスリリースしたところ、「遊々の森」における総合学習ではテレビ局や地方紙・地元紙が取材に訪れ、テレビのニュースでも大きく取り上げられました。

同じように、「1日森林官」についてもボランティアの公募から当日の仕事ぶりが報道され、インパクトのある取り組みとなりました。



写真-10 マスコミによる現地取材

また、去年の青森森林管理署のゴミ不法投棄に関する発表は記憶に残るものでしたが、当署では10月に住田町の森林認証を支援するかたちでゴミ処理に取り組みました。

当日は、国道沿いの空き缶拾いという感覚で作業に臨みましたがゴミの多さに驚かされ、地元紙に情報提供したところ取材に訪れ、環境問題として大きく報道されました。

なお、マスコミが取り上げたことで、住田町と大船渡警察署が不法投棄巡視区域に指定し、「警告」の看板も設置され、森林管理署もパトロールを強化したことで、その場所への不法投棄は無くなり、一定の成果が収められました。

今後は、この経験を元に市や町などと連携し、川上から情報発信や問題を提起することで地域と一体となった取り組みができればと考えます。

